

原著論文

保育学生の施設実習に対する
自己効力感尺度の作成について

Development of The self-efficacy Scale for Childcare
Student's Practical Work in Social welfare facilities

河野 清志¹⁾

Kiyoshi Kawano

キーワード: 自己効力感尺度、施設実習、保育学生

I. 目的

2008 年の保育所保育指針の改定を受け、翌年から保育士養成課程の検討が行われた結果、2011 年度から改正された保育士養成課程が始まった。実習に関する改正では、「保育実習Ⅰ」「保育実習指導」の計 5 単位を「保育実習Ⅰ」4 単位と「保育実習指導Ⅰ」2 単位となり、選択必修科目である「保育実習Ⅱ又はⅢ」にも「保育実習指導Ⅱ又はⅢ」の 1 単位を加えることになった。また、保育実習Ⅰにおける実習受け入れ施設の範囲や要件の見直しが行われ、保育実習Ⅰにおける「居住型児童福祉施設等」での実習を居住型に限定せず、障害児通所施設等を含めることになり実習先の幅が広がった。このように実習の充実が図られてきているが、保育所での実習と比べ施設実習は学生の実習に対するモチベーションが決して高いとは言えない。この理由として、保育士は保育所で働くという強いイメージをもって養成校へ入学したのことが多いことや、保育士養成校において行われる実習に施設実習があるということを入学した後に初めて知る者が多いこと、実習へ行く施設に馴染みがないことなどが挙げられる。

実習は机上で学んだ理論や知識を実際の現場で試すことにより、より実践に適したスキルの習得ができる貴重な機会である。したがって、効果的な実習を行うためには事前学習の内容充実を図るのはもちろんであるが、何よりも重要なことは学生自身の実習に対する取り組む意欲を高めることである。これらに、影響を与えるものとして自己効力感 (self-efficacy) があるのではないかと考える。

Bandura(1977)によると、自己効力感とは、ある行動に対して上手くやることができるという個人の確信とされている。そして、「自己効力感が上昇することによって、成功するための努力を重

¹⁾ 山陽学園短期大学幼児教育学科 : Department of Pre-Elementary Education, Sanyo Gakuen College

ねていくほど、自己肯定的な信念は技術の発達と個人的な自己効力を促進していく」(Bandura,1995)としている。この理論を実習に関連させると、実習を肯定的に捉え、実習中に直面する困難な課題や予測不可能な事態に対しどれだけ自分が上手く対処することができるかという信念の強さが、実習内容やその後の学習意欲に大きな影響を与えるのではないかと考えられる。

実習に関する自己効力感に関する研究では、岡田(2008)による生活支援に関する自己効力感と実習達成感の研究がある。岡田(2008)は、生活支援自己効力感尺度を開発し、その尺度を用いて、施設実習における実習達成感との関連を調べた。その結果、生活に関する自己効力感と実習達成感に関連が示され、実習で前向きに生活支援活動が行えるよう事前に指導していくことが、実習効果である実習達成感の向上につながることを示唆した。また、浜崎ら(2008)は、保育実習が保育者効力感に及ぼす影響について検討し、その結果、実習前の保育者効力感は、実習中の保育スキルや実習態度に影響を与えることが示された。そして、実習前の効力感の高さは、実習時の保育に関するスキル向上に影響を与え、それがまた後の保育者効力感を高める要因になっていることを示唆している。森(2003)は、自己効力感を高める実習教育プログラムのあり方を探るために「観察実習」「参加実習」「施設実習」を終えた学生を対象に、自己効力感と実習評価の関連を調べた。その結果、保育者に求められる技術面への自己評価が実習経験により高まることが明らかにされ、自信をもって積極的に仕事に遂行する者は、明るく快活に実習に取り組んだことが示された。また、保育技術に対する自信を深める要素として、明るく快活に実習に取り組むという意識が関与していたことから、自己効力感を高める実習教育プログラムのあり方を探ることの重要性を示唆した。

このように保育学生を対象とした自己効力感に関する研究では、自己効力感と実習には関連が見られることが明らかにされているが、施設実習そのものを対象とした自己効力感尺度はなく、研究結果も見当たらない。

よって本研究では、効果的な事前・事後指導、実習教育プログラムあり方を検討するための基礎資料を得るために、施設実習に関する自己効力感について分析し、施設実習自己効力感尺度の開発を行うことを目的とし、さらにその活用について検討を行うこととする。

II. 方法

1. 施設実習自己効力感尺度の項目の選定のための予備調査

尺度項目を得るために施設実習へ行く保育学生へ自由記述によるアンケートを実施し、項目の収集を図り、分類し尺度項目の選定を行った。なお、対象学生は施設実習が入学してから初めての实習となっている。調査の実施時期は 2011 年 1 月で、2 月初旬に施設実習を控えている 109 名の保育学生を対象として、「実習にあたって期待や楽しみにしていること」「実習でどのようなことを学びたいか」「実習を終えて、自分にどのような変化を期待するか」などの問いに対して思いのまま自由に記述するよう求めた。その結果、施設実習の自己効力感に関する概念が延べ 647 件得られた。これを、KJ法により集約し最終的に「コミュニケーション」「他者理解」「自己成長」「職業理解」4つのカテゴリーに分類し、これに基づき設問を作成した。また、関西福祉科学大学が社会福祉士の実習前後に実施している実習アンケート項目と、岡山県保育士養成協議会養護実習委員会が作成している実習評価項目ⁱⁱ⁾の一部を加筆、修正したものを項目として加え、施設実習担当教員が項目の内容妥当性を検討した結果、計 33 項からなる尺度項目を作成した。

2. 調査対象者及び調査時期

調査対象者は、A短期大学の幼児教育学科に在籍しており施設実習(保育実習Ⅰ)を1週間後に控えている1年生108名で、2011年1月下旬に調査を実施した。なお、入学してから施設実習が初めての实習となっている。

3. 手続き及び調査方法

作成した尺度を用いて、「非常にそう思う」「だいたいそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の5件法の質問紙を作成し、2011年1月に保育科学生108名に記名式による回答を求めた。なお、回答にあたっては、プライバシーは保護されること、調査以外に使用されることは決してないことを口頭で教示し、倫理的配慮を行った。

III. 結果

有効回答数は108であった。まず、統計的分析を行う前に、天井効果とフロア効果を調べた。その結果、10項目において天井効果が見られたため、分析から除外した。

1. 因子的妥当性の検討

分析する23項目に対して、因子分析(最尤法、斜交回転・Promax)を行った。固有値1基準で4因子抽出されたが、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子構造が妥当であると判断した。因子負荷量の絶対値が0.4未満のものと2つ以上の因子に高い負荷をもつ項目を削除し、因子分析(最尤法、斜交回転・Promax)を繰り返した結果、5項目を削除し18項目3因子構造を得た。尺度全体の累積寄与率は60.7%であった。また、因子間相関は第Ⅰ因子と第Ⅱ因子で $r=.70$ 、第Ⅰ因子と第Ⅲ因子で $r=.66$ 、第Ⅱ因子と第Ⅲ因子で $r=.55$ であった。

次に信頼性を確かめるためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、第Ⅰ因子 $\alpha=.90$ 、第Ⅱ因子 $\alpha=.95$ 、第Ⅲ因子 $\alpha=.77$ となり十分な信頼性が得られた。

なお、因子負荷量が低く削除された項目は項目9「施設実習では、自分が福祉の仕事に適しているか見極めることができる」、項目10「施設実習では、新しいことを学ぶために積極的に取り組むことができる」、項目14「施設実習では、職員に適切な方法で自分の意見を述べる」、項目17「施設実習では、難しい課題でも興味をもち、積極的に取り組むことができる」項目20「施設実習では、明確な目標や課題をもって実習に取り組むことができる」であった。Table 1にはプロマックス回転後の因子パターンと固有値、寄与率、Cronbachの α 係数を示した。

Table 1 施設実習自己効力感尺度の因子分析の結果(最尤法、斜交回転・Promax)

質問項目	因子 I	因子 II	因子 III	
I 施設理解 ($\alpha=0.90$)				
32. 施設実習では、そこで働く職員の職種とそれぞれの仕事内容について理解することができる	0.84	0.06	-0.17	
13. 施設実習では、職員に質問や助言を求めることができる	0.81	-0.16	0.04	
33. 施設実習では、その日の実習の課題や反省を翌日以降に生かすことができる	0.76	0.00	-0.13	
12. 施設実習では、職員の方とコミュニケーションを積極的に図り、良い関係を持つことができる	0.72	-0.06	0.01	
30. 施設実習では、具体的で達成可能な1日の課題を設定し、それに基づき行動できる	0.70	0.05	0.04	
31. 施設実習では、実習先が提供しているサービスの内容を理解することができる	0.64	0.12	0.02	
11. 施設実習では、自分の能力を発揮するために努力することができる	0.60	-0.10	0.29	
29. 施設実習では、利用児・者の安全に配慮することができる	0.52	0.25	-0.08	
15. 施設実習では、利用児・者の方とコミュニケーションを積極的に図り、良い関係を持つことができる	0.48	-0.03	0.31	
II 利用者理解 ($\alpha=0.85$)				
26. 施設実習では、利用児・者の特性やニーズに応じた行動をとることができる	-0.16	0.96	0.06	
28. 施設実習では、環境整備や作業を的確に行うことができる	0.29	0.70	-0.15	
25. 施設実習では、利用児・者の特性やニーズを把握することができる	-0.07	0.69	0.03	
27. 施設実習では、1日の生活の流れを理解して利用児・者に働きかけができる	0.37	0.46	0.03	
III 向上心 ($\alpha=0.77$)				
3. 施設実習を経験すると、全体的な学業成績を上げることができる	-0.23	0.02	0.69	
19. 施設実習に対して熱意がある	0.04	-0.04	0.64	
6. 施設実習では、他の授業に役立つ知識や技術が身に付けることができる	0.08	-0.09	0.59	
16. 施設実習では、先入観を持たずに利用児・者と接することができる	0.02	0.25	0.54	
24. 施設実習では、たとえ困難な目標や課題でも挑戦することができる	0.25	0.17	0.48	
	固有値	8.16	1.50	1.26
	因子寄与率(%)	45.36	8.31	6.99

第 I 因子は 9 項からなり、「そこで働く職員の職種とそれぞれの仕事内容について理解することができる」「職員に質問や助言を求めることができる」「その日の実習の課題や反省を翌日以降に生かすことができる」「職員の方とコミュニケーションを積極的に図り、良い関係を持つことができる」

など、実習を肯定的に捉え施設の職種理解に努める項目に高い因子負荷がみられた。よって第Ⅰ因子を「施設理解」と命名した。

第Ⅱ因子は4項からなり、「利用児・者の特性やニーズに応じた行動をとることができる」「環境整備や作業を的確に行うことができる」「利用児・者の特性やニーズを把握することができる」「1日の生活の流れを理解して利用児・者に働きかけができる」など、利用児・者の理解に努める項目に高い因子負荷がみられた。よって、第Ⅱ因子を「利用者理解」と命名した。

第Ⅲ因子は5項からなり、「施設実習を経験すると、全体的な学業成績を上げることができる」「施設実習に対して熱意がある」「施設実習では、他の授業に役立つ知識や技術が身に付けることができる」「施設実習では、先入観を持たずに利用児・者と接することができる」など、実習による自己成長に期待する項目に高い因子負荷量がみられた。よって第Ⅲ因子を「向上心」と命名した。

2. 弁別的妥当性の検討

作成した尺度の項目を分析するために G-P 分析を行い、尺度の有効性を検討した。まず、項目の合計得点を尺度得点とし、その尺度得点の上位 25%までにある被験者を上位群、下位 25%にある被験者を下位群として各尺度項目について t 検定を行った。その結果、全ての項目において 0.001%水準の有意差がみられ、尺度内の他項目との等質性が示された (Table2)。

Table2 施設実習自己効力感尺度の上位-下位分析結果

下位尺度	項目	上位尺度 平均得点	下位尺度 平均得点	t値
施設理解	32	4.85	3.56	8.57***
	13	4.81	3.52	8.38***
	33	4.81	3.52	9.59***
	12	4.67	3.30	8.20***
	30	4.52	3.19	9.87***
	31	4.56	3.22	8.03***
	11	4.81	3.19	12.39***
	29	4.81	3.52	8.92***
	15	4.44	3.07	8.44***
利用者理解	26	4.41	2.89	13.28***
	28	4.52	2.93	12.96***
	25	4.41	3.11	7.84***
	27	4.70	3.11	14.65***
向上心	3	3.89	2.30	7.21***
	19	4.37	2.81	6.65***
	6	4.37	2.96	7.14***
	16	4.41	2.89	9.71***
	24	4.67	3.11	10.76***

***p<.001

IV. 考察

本研究の目的は、施設実習自己効力感尺度の作成とその活用であった。そのために、保育学生を対象として自由記述による予備調査を行い、項目を収集した。次に、作成した尺度を実施し因子分析による項目の選定を行った。その結果、3因子18項目からなる尺度を得た。

第Ⅰ因子は、積極的な姿勢で実習に取り組むことで施設の理解に努める「施設理解」因子、第Ⅱ因子は、実習で接する利用児・者の特性やニーズの把握を行うことで利用者理解に努める「利用者理解」因子、第Ⅲ因子は、施設実習を肯定的に捉え、実習を達成することにより自己成長を図ることができるという「向上心」因子であった。施設実習の現場では、実習生は現場職員と利用者から多くのことを学ぶことになる。それは、「実習生対職員」「実習生対利用者」「職員対利用者」という3つの関係を捉えると分かりやすい。例えば、実習生は職員に直接指導を受けたり、職員と利用者のやりとりを観察する中で、施設の機能や位置づけについてや、そこで働く専門職者の職務と専門性について理解を深めることができる。また、利用者に直接触れ、喜怒哀楽共に分かち合う中で、また設定した目標達成のために思考錯誤する中で障害理解や利用者理解を深めることができる。そして、最終的にこれらの経験を通して人間観、福祉観が構築されていくのである。今回、施設実習に関する自己効力感で見出された3つの因子はこれらの施設実習の意義に一致するものと考えられる。

「保育士養成課程検討会中間まとめⁱⁱⁱ⁾」で施設実習について教授する内容と示しているものは「施設の役割と機能」「子どもの理解」「養護内容・生活環境」「計画と記録」「専門職としての保育士の役割と倫理」の5つある。具体的には、「施設の役割と機能」として施設の生活と一日の流れ、施設の役割と機能が示されている。「子どもの理解」では、子どもの観察とその記録、個々の状態に応じた援助やかかわり、「養護内容・生活環境」では、計画に基づく活動や援助、子どもの心身の状態に応じた対応、子どもの活動と生活環境、健康管理、安全対策の理解、「計画と記録」では支援計画の理解と活用、記録に基づく省察・自己評価、「専門職としての保育士の役割と倫理」では保育士の業務内容、職員間の役割分担や連携、保育士の役割と職業倫理となっている。

今回、見出された尺度とこれらの実習内容を照らし合わせると、「施設の役割と機能」と「専門職としての保育士の役割と倫理」についての自己効力感が「施設理解」因子、「子どもの理解」「養護内容・生活環境」「計画と記録」についての自己効力感が「利用者理解」因子に該当すると考えられ、示されている実習目標を網羅しているといえる。本尺度ではこの2因子に加え、実習内容に関すること以外のものとして、実習経験による自己成長を期待する「向上心」因子を加えた3因子が見出された。今後、この尺度を使用し、実習前と実習後での施設実習に関する自己効力感の変化の調査や、実習評価との関連性を調べることで、実習プログラムの見直しや、効果的な実習事前、事後指導のあり方について検討を行っていきたい。

引用文献

Bandura, A. 1977 Self-efficacy. *Psychological Review*, 84, pp.191-215.

Bandura, A. 本明寛・野口京子監訳 1997 激動社会の自己効力 金子書房

Bandura, A. 1995 SELF-EFFICACY IN CHANGING SOCIETIES by Cambridge University Press

岡田恵子「福祉施設における生活支援自己効力感尺度の作成」2008年 川崎医療短期大学紀

要 18(1), 315-320,

岡田恵子「保育科学生の施設実習における生活支援に関する自己効力感と実習達成感との関連：障害系施設と養護系施設との比較を通して」2008年 川崎医療短期大学紀要 28, 65-70

浜崎隆司 加藤孝士 寺菌さおり 荒木美代子 岡本かおり「保育実習が保育者効力感,自己評価に及ぼす影響：実習評価を媒介した因果モデルの検討」2008年 鳴門教育大学研究紀要 23, 121-127

小藺江幸子「保育実習自己効力感尺度作成の試み」2009年 淑徳短期大学研究紀要 48, 123-135, 2009

森知子「保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連—保育者養成校における実習教育プログラムをとおして—」2003年 関西学院大学 臨床教育心理学研究 29(1), 31-41, 2003-03-25

ⁱ 関西福祉科学大学『『現場実習』教育の現状と課題 第9号』2008年 関西福祉科学大学福祉実習相談室

ⁱⁱ 岡山県保育士養成協議会編「施設実習日誌」2011年 岡山県保育士養成協議会

ⁱⁱⁱ 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程検討会中間まとめ」厚生労働省雇用均等・児童家庭局 2010年3月